

# 神理の郷よみやま話

北九州市の文化財を守る会理事 長

宇野 慎敏

神理教本院の造化宮（宇宙や万物を造りあげた神の宮）に「物部氏の祖先神の饒速日命の第十二代物部伊美岐が履中天皇の詔をうけて全国の疫病を平癒し九州に下りこの地に神籬（神をお迎えする祭祀の場所）を建て、天在諸神を祀り万民安全を祈念され信仰の大成を定められたと伝えられる」とする。

これまで「物部伊美岐」という名は「古事記」「日本書紀」（以下「記紀」）には知られていない。しかし「記紀」で物部氏が活躍しだすのは、この履中天皇あたりからであり、その時期は西暦で言えば五世紀前半と中頃の時期に相当する。

仁徳天皇陵古墳は、全長四百八十六mもあり、世界最大の墳墓である。

この仁徳天皇陵古墳（大仙古墳）は、考古学の形態編年で言えば、左右のくびれ部にある造出が前方部寄りに下がってきており、その時期は五世紀中頃と推定される。

しかし日本書紀に記されているとおりとすると応神天皇の息子は仁徳天皇であるから、その墳墓の時期は五世紀初頭と前半と考えられるので、二十年から三十年の齟齬が生じる。

したがって現段階では、この仁徳天皇陵古墳は履中天皇陵古墳かもしれない。その後の反正天皇陵古墳の可能性が高い。

仮に世界最大の古墳が履中天皇とすれば、この時期にヤマト王権は最も軍事力が強大になり、国力が充実した時代で、当然中央氏族の一員でもある物部氏も大連として全国的に活躍していたことは十分に裏付けられよう。

現に「日本書紀」に第二十一代雄略天皇十八年の秋八月（旧暦）の条に、中央氏族の物部菟代宿禰・物部目連が曾根の豪族（北九州市小倉南区大字曾根・規矩郡に在住）物部聞大斧手を連れて伊勢の朝日郎が乱を起したので退治しに行つたと記している。

この記述が実際に起こっていたのか明らかではないが、物部聞大斧手の古墳と推定されているのが全長五十五mの前方後円墳の茶毘志山古墳がそれである。

この前方後円墳は、宮内庁が陵墓参考地としている全長二百九十mの土師ニサンザイ古墳と相似形である。

土師ニサンザイ古墳は、第十八代反正天皇の空墓と推定されている古墳である。反正天皇は履中天皇の弟にあたり、履中天皇と同じ仁徳天皇を父とする。

今から千五百年ほどの前の測量技術で、二百九十mを五十五mの五分の一に縮小し、なおかつ後円部と前方部の比率を全く同じにする相似形であるということは、土木技術者をヤマトからこの北九州に派遣していることが考えられる。